令和７年度「人権教育研究推進事業」研究指定校事業

都道府県・指定都市名（　徳島県　）

１．基本情報

研究指定校名	板野町板野中学校

○これまでの研究指定等の状況

―

○学級数

13 学級（うち特別支援学級：４学級）

○児童生徒数

261 名（令和 8 年 1 月 29 日現在）

○URL

https://school.e-tokushima.or.jp/jh_itano/

２．調査研究のテーマ、概要、指定理由

調査研究のテーマ	人間としての誇りをもち、語り合い認め合える人権教育の創造

○調査研究のテーマを設定した目的

本校は県北部に位置し、北に阿讃山脈、南に吉野川平野があり、高速道路を中心とした交通網の整備により都市近郊型の特徴が現れ始めている地域である。また、米、野菜園芸･果樹など農業生産を産業基盤としながら文化教育の拠点としての役割を果たしている。さらに、近年では、二次・三次産業用地の造成に伴い、人・もの・情報が交流する地域として成長しつつある。

生徒数は現在 261 名で、学級数は 13 学級（うち特別支援学級は 4 学級）である。素直で優しい生徒が多く、人と関わることが好きで、教職員とも安心して対話する場面が多く見られる。また、教職員が作業をしていたり、荷物を持っていたりすると「手伝いましょうか。」と自然に声をかけることもよくあり、周りの手助けができる生徒が多い。

一方、生徒同士の関係においては、相手を思いやる言動ができなかったり、思いやりの心があっても行動に移せなかったりするなどの課題がある。生活アンケートや学

校評価アンケートの結果からは、自己肯定感が十分に高まっていない現状が分かり、課題の要因としてあげることができる。また、個々の生徒は素晴らしい能力や可能性をもっているが、自己表現をはじめ主体的な言動を示すことが苦手であるといえる。授業をはじめとする学校生活では、自分の思いや考えを語ることができる反面、相手の思いをしっかり受け止め、互いに認め合い語り合える段階までには至っていない。生徒同士でトラブルが起きた場合でも、関係を修復しようとせず、心にわだかまりを残したまま生活する傾向が見られる。その結果、互いに思いを伝えて人間関係を改善することができず、SNS 上でのトラブルに発展する場合もある。

これまで、人権に関する授業はもちろんのこと、各教科の授業や様々な行事で自分の思いを語り表現するための機会を設けてきた。また、学級の中で発言を苦手とする生徒が一定数いる中で、ICT 機器を利用して思いや考えを伝え合う取組も行ってきた。生徒が自分の思いを伝え、相手の気持ちや立場を尊重し受け止める体験を重ねていく中で、互いの思いが繋がる人間関係を構築できる生徒を育てていきたい。日々の学校生活における自己表現の機会や他者との関わりは、自分も周りの人も大切な存在として認識することにつながり、その営みを通して自己肯定感を高めることができると考える。そして、学校を巣立った後でも繋がり、自分や友達が困難や差別に直面したときに相談し合ったり、支え合ったりできる関係を築いてほしいと考え、調査研究のテーマを設定した。

〇調査研究の概要

本校の重点行動目標は「時間を守る」「掃除の徹底」「聞こえる挨拶」「とことん続ける」の４つである。重点行動目標を日常の学校生活において、自分に関する観点と人との関わりの観点から目標を設定し、達成するための言動を繰り返すことでよりよい生活習慣が形成されると考え実践している。本研究では、生徒の日常、人権学習、行事等のそれぞれの取組における経験（学び）を相互に関連づけることにより、人権教育は深い学びの実践となり、充実を図ることができると考えた。

〇指定理由

板野町では基本的人権の確立と人権教育を徹底するという方針のもと、人権教育を生涯学習の中核に据え、推進者層の拡大・強化に努め、住民一人一人に浸透する人権教育を積極的に推進している。また、平成５年に「板野町部落差別撤廃・人権擁護に関する条例」を制定し、部落差別をはじめ様々な差別の解消に向けて取り組んでいる。

板野中学校では、令和６年度県教育委員会指定「多様性を認め合う人権教育推進協力校事業」の指定を受け、「人間としての誇りをもち、語り合い認め合える人権教育の創造」をめざし、同和問題をはじめ、あらゆる人権問題の解決に意欲と実践力をもつ生徒の育成を図っている。教職員の手助けができる生徒が多い一方、生徒同士では、相手を思いやる言動ができなかったり、思いやりの心があっても行動に移せなかったりするなどの課題がみられる。そこで、板野中学校では、生徒が自分の思いを伝え、相手の気持ちや立場を尊重し受け止める体験を重ねていく中で、互いの思いが繋がる人間関係を構築できる生徒の育成に取り組んでいる。また、板野町内の保育園、幼稚園、小学校、高等学校、特別支援学校が相互に公開授業を行い、研修会などを実施することにより、連携を図り一貫した教育内容の創造を行っている。他にも、令和６年度は政府拉致問題対策本部が主催した「拉致問題に関する中学生サミット」に参

加するなど、積極的に様々な人権課題解決に向けて取り組んでいる。
　令和７年度は、令和６年度の研究をさらに発展させ、人権教育の推進を図るとともに、研究成果を研究発表会で広く普及することで、県内人権教育の一層の充実及び発展に期待ができるため、板野中学校を指定することが最適であると考える。

３．取り組んだ人権課題

※　該当するものに〇印。複数選択可。うち、最も主要な人権課題１つに◎印。
※　下線部は、令和７年度事業における重点課題。

① 子供	〇
② 女性	〇
③ 高齢者	〇
④ 障害者	〇
⑤ 同和問題	◎
⑥ アイヌの人々	〇
⑦ 外国人	〇
⑧−１ HIV 感染者等	〇
⑧−２ ハンセン病患者等	〇
⑨ 刑を終えて出所した人	〇
⑩ 犯罪被害者等	〇
⑪ インターネットによる人権侵害	〇
⑫ 北朝鮮当局による拉致問題等	〇
⑬ 性的指向、性自認	〇
⑭ その他（災害時における人権問題）	〇

４．調査研究の内容等

〇調査研究の内容

　生徒の実態はもちろんのこと、地域の状況を踏まえた人権学習の充実が今後も必要になると考える。また、これまで本校で実践してきた人権学習をさらに発展させ、調査研究のテーマ「人間としての誇りをもち、語り合い認め合える人権教育の創造」に向けて、次の項目に重点をおいて研究を進める。

①体験的な活動を重視した学習
②外部の人との出会いを重視し、自分自身を振り返る学習
③思いを伝え合う活動の充実
④異校種間での交流
⑤ICT 機器を利用した、思考・まとめ・表現のスキル学習
⑥教職員研修の充実

〇実施方法

①体験的な活動を重視した学習

１年生は板野支援学校との交流学習を２回実施した。交流前に事前学習として、板野支援学校の教員から板野支援学校の特色と、通っている生徒の特性などについて学んだ。１回目は板野支援学校がホストとなり、オンラインで数人ずつの班に分かれて交流した。２回目は板野支援学校を訪問し活動した。１回目の交流学習で一緒にゲームを行う中で気付いたことや学んだことをもとに、２回目の交流に向けて一緒に楽しめる活動を考え、対面で交流することを通して、自分自身や身の回りにある偏見や差別について見つめ直すことができた。

２年生は修学旅行で沖縄を訪れた際、平和について考えた。現地で戦争体験者からの講話を聞き、平和の礎や糸数壕、ひめゆり平和祈念資料館を訪れたことで、戦争の現実に向き合い、命の大切さや平和の尊さについて学ぶことができた。

また、板野町人権啓発文化展や板野町人権問題意見発表及び町人権問題講演会へ全校生徒が参加した。文化展に展示している町内の園・校や、地域の方の作品を見学することで、作製した人の思いや願いに触れ、その後の人権学習へ意欲が高まった。

②外部の人との出会いを重視し、自分自身を振り返る学習

「板野塾」と称して、「可能性」「自己肯定感」「本気の大人の姿をみせる」をテーマに県外の著名な講師を招いて全校生徒を対象に講演会を行った。理想と現実の乖離を感じ、自信を失いやすい中学時代に、家族や教員以外の大人から「自分たちの可能性は無限にある」こと、「感謝の大切さ」などを本気で教わることで、自分の力を信じることや人との関わりの大切さを実感することができた。

１年生では振り込め詐欺撲滅運動を行った。徳島板野警察署と連携し、近隣の銀行・郵便局へ訪れる方に、振り込め詐欺を注意するメッセージカードを添えた花を渡しながら、振り込め詐欺の注意を呼びかける活動をした。お礼を言われたり話しかけられたりすることで、地域へ貢献することや、自分たちのできることを実感した。

２年生では、学級の代表が識字学級生との交流を行った。教職員も識字学級に参加し、そこでの学びをもとに識字運動を通した同和問題に関する学習を展開した。交流会を通して、学級生の思いを知り、学年全体に伝えることで、差別をなくしていくために自分に何ができるかを考えた。

③思いを伝え合う活動の充実

「校内人権に関する意見発表会」では、各学級の代表が全校生徒に意見を発表し、その発表に対して生徒それぞれが思いを語った。意見交換の場では、他者の意見を聞くことで、自分と異なる意見や思いがあることに気付き、それぞれに共感することができた。この意見発表会を生徒が成長できる場とし有意義な時間とするために、各学級で日常の取組や人権学習を充実させ、他者の思いを受け止め、誰もが安心して自分の思いを語れる集団づくりを行ってきた。

また、本校独自のキャリアパスポート「明日への扉」を活用し、目標を設定し自己評価を行った。目標を具体的に立て、振り返る基準を明確化させて生徒自ら PDCA サイクルを意識できるようにすることで、自分にもできるという自信を育んだ。さらに、思いを伝え、思いを受け入れる雰囲気づくりのために、帰りの学級活動や学年集会を利用して、ソーシャルスキルトレーニングの要素を含んだゲームなどを実施し、固定化された人間関係を広げ、誰とでも話せる雰囲気づくりを行った。

④異校種間での交流

前述した１年生の板野支援学校との交流学習の他に、２年生では職場体験学習で出身小学校や保育園に行った生徒もいる。また、３年生では園児と保育実習や体育祭予行でのダンスを通して交流を行うなど、各学年それぞれで、自分の成長を客観的に捉え、地域とのつながりを実感できる機会とした。

⑤自立型人間の育成をめざした ICT 機器の活用

各教科や行事等の中でタブレットを使用し、調べたことや考えたことなどをまとめ、生徒間で情報や思いの共有化を図り、自立型人間（周りの人に愛され、他者の夢を応援できるようになることを通して、自信をもって社会へ貢献できるようになる人間）の育成に取り組んだ。

⑥教職員研修の充実

学年研修として、月に２回の授業づくり研修会を実施し、研究授業や授業研究会を各学年２回実施した。また、同和問題について正しく認識していくため、部落史の講演会も実施した。その他には、ICT 機器を活用した授業実践のために、各教科でタブレット端末を利用した研究授業を行い、「生徒間での共同作業」や「思考ツールの利用」などの効果的な活用方法について教職員研修を実施した。

○検証・評価・改善・普及

①検証・評価・改善

○アンケートから生徒の心情や意識の変容を検証・把握し、教職員研修（全体・学年）で分析するとともに、課題を把握して課題解決に向けての手立てや取組の改善を図った。

※アンケート･･･Q-U テスト、学校評価アンケート、自己理解アンケート、
「未来の自分を今創る」月の振り返りシート　等

○授業での生徒の感想、「明日への扉」、ワークシート、講演会の感想などから意識の変容を把握し、検証した。

○学年だよりや学級だより、学校ホームページを活用して、人権学習や各学年の活動、行事などについて、生徒や保護者へ発信することで、家庭への啓発につなげた。

〈アンケート結果と検証〉

ア.「未来の自分を今創る」月の振り返りシート（抜粋：肯定的回答率：4 月→12 月）

「とことん続ける行動目標」は何をしたらいいかハッキリしている。	79.7% → 84.3%
あなたは自分に自信がもてるようになっていますか。	82.8% → 86.0%

イ. 自己理解アンケート（抜粋：肯定的回答率の変化 5 月→12 月）

自分のことを大切にして生活している。	71.3% → 75.6%
私は一人の大切で重要な人間である。	68.3% → 72.3%
考えや感じ方にはそれぞれ違いがあってよいと思う。	92.6% → 94.2%

誰かがつらい（悲しい）思いをしているとき、一緒に考えるようにしている。	83.9% → 87.1%
相手と対立したとき、互いの立場を尊重して解決しようとしている。	75.7% → 79.0%
私は他の人の気持ちになることができる。	70.0% → 74.1%
板野町が好きである。	63.9% → 66.1%

「未来の自分を今創る」月の振り返りシートの結果からは、自分に自信がもてるようになった生徒が 82.8%から 86.0%に増加しており、自分を肯定的に捉える生徒が増えていることが分かる。これは、日々の振り返りを行うキャリアパスポート「明日への扉」を使用し、生徒自らが設定した具体的な行動目標を振り返り、達成を積み重ねてきた成果であるといえる。一方で、「明日への扉」を有効に活用できず、自己肯定感が十分に高まっていない生徒への対応が課題である。今後は「明日への扉」の意義を再確認し、「今日の自分をやり直すとしたら」という視点での振り返りや、教職員のコメントによる例示やアドバイスの工夫、目標の再設定を促す面談など、個に応じた働きかけを強化し、自己肯定感の向上を図っていきたい。

また、今年度を含めたこれまでの継続的な取組により、「自分のことを大切にして生活している」という回答が増加しており、生徒の自尊感情の高まりがうかがえる。さらに、「考えや感じ方にはそれぞれ違いがあってよいと思う」との回答が 94.2%に達していることから、他者との違いを認めようとする意識も育ってきている。

こうした自己を大切にする意識の向上は、他者を尊重し、その違いを認めようとする態度の変容にもつながっている。自己理解アンケートにおける「誰かがつらい（悲しい）思いをしているとき、一緒に考えるようにしている」「相手と対立したとき、互いの立場を尊重して解決しようとしている」「私は他の人の気持ちになることができる」といった項目の数値向上からも、周囲を大切にし、互いを理解し、認めようとする生徒が増えてきたことが分かる。それに伴い、生徒の人間関係にも変化が見られ、トラブルが生じた際にも対話を通して解決を試みる姿が見られるようになってきた。ときには、教職員が生徒と共に話し合うこともあるが、今後も自分たちで解決していこうとする主体性を大切に育んでいきたい。

他者の意見を参照するために ICT 機器を利用することで、自分と同じような考えの生徒の存在に気付き、自信をもって発表する姿が見られた。また、自分と異なる考えがあることに気付くことで、更に深く考える姿が見られた。ICT 機器を利用することで学級全員の考えを短時間で共有でき、全員と意見を共有する有効な手段となった。帰りの学級活動や学年集会でのソーシャルスキルトレーニングの要素を含んだゲームでは、回を重ねるごとに、学級の中で誰とでも話せる雰囲気ができてきた。特に１年生の１学期の学年集会での活動後の感想では、「話したことのない人と話ができた」という記述もあり、学年集団づくりとしての効果があった。さらに、「板野塾」（講演）での質疑では、生徒自らが、部活動や将来の夢を叶えるために、今どうすればよいのかなどの質問をした。感想では自分の現状を前向きに捉え、可能性を信じ行動していこうとする記述が多かった。講演のテーマである「可能性」「自己肯定感」について生徒に伝わり、自己肯定感向上へとつながったと考える。

最後に「板野町が好きである。」は 2.2 ポイントの増加に留まっており、66.1%である。生活している地域や板野町を大切にしたいという気持ちが育ってきているものの、さらに板野町で育ったことを誇りに思い様々な人と関われるような取組が必要である。地域や板野町が好きであるという気持ちを基盤に、学校を巣立った後でもつながり支え合える関係の構築をめざして、普段から教職員が意識し生徒に接していかな

ければならないと、改めて確認した。

②普及
〇学年通信などを通して、日頃の人権学習や講演会の感想を各家庭に伝えることで、家庭内で人権について話し合う機会を設けた。
〇「とことん続ける行動目標」の振り返りシートに保護者のコメントを書いてもらうことで、生徒の頑張りや成長を共有するとともに、保護者のアドバイスや応援のコメントにより生徒の継続する意欲を高めた。
〇「校内人権に関する意見発表会」や「板野塾」に保護者が参観することで、生徒の思いや講演の内容を家庭でも共有する機会をもった。
〇研究発表会では、全学級が同和問題についての授業を公開し、県内各校へ研究の成果や課題の普及を図った。

５．推進体制（都道府県・指定都市教育委員会等を含む）

